

交通 評論



悪夢のような震災から1年以上たったが、被災地はまだ問題が山積している。

特に、原発事故によって避難を余儀なくされている福島県の一部では、春になっても仮設住宅暮らしが続き、まだ今後の生活のめどが立っていない。

空間線量の高い地域では、住宅をいくら除染しても裏山や土壌に付着したものはガンマ線を出し続けているため、乳幼児や妊婦の居住は難しい。昨年この欄で紹介した、日本で最も美しい村の一つであった福島県・飯館村は現在計画的避難区域の中にあり、日中は立ち入ることができないが、夜間は滞在できない。家族が離れ離れになって暮らしている例も少なくない。

ガンマ線を出すもの、いま最も問題になっているのはセシウム(Cs)137/134である。両者はほぼ半分ずつで、Cs137の半減期は30年でCs134は2年である。気象研究所によると福島第一原子力発電所から大気中へ放出されたCs137はそれぞれ1万5000、2万テラ becquerelといわれる。天文学的ともいえる数字である

たった10キログラム

土器屋 由紀子

このたった10^{キログラム}が、福島県のいくつかの町や村を人の住めないところに、広い地域を耕作不能にして、

て、人類はウラン原子から膨大なエネルギーを取り出すことに成功したにもかかわらず、その使い方を誤ってばらまいてしまった危険な放射性核種をたった10^{キログラム}であつても元に戻すことができないのである。

これが同じことが、いまCs137を濃縮する過程で頻繁に起こっており、中間的な保管の困難な「廃棄物」を大量に生産している。科学者たちもいま、できる限り濃縮して放射性核種を生活の場から遠ざけようとして必死になっている。

人々の生活を破壊し、世界を恐怖に陥れている。もし、マックスウエルの魔物でもアラジンの魔法使用でもなんでもよいから、この飛び散った疫病神たちを集めて、鉛製のしっかりしたバッグに入れてくれたらどんなにか助かることだろうと思う。

30年近く前に、環境放射能を測定する研究室にいたことがあるが、環境影響を全く無視できるような濃度の当時の日本各地の降水試料について、濃縮と化学分離を繰り返したところ測定

しかし、この除染過程はあまりに未知の分野が多く、科学技術の無力さは絶望的にさえ見える。理論物理学から始まり、兵器として実用化された原子力を平和利用のために飼いならしたと錯覚していたことがいかに傲慢(ごうまん)だったかを思い知らされていると言えるのだろうか。

科学技術の進歩によつて、濃縮と化学分離を繰り返したところ測定

科学技術の進歩によつて、濃縮と化学分離を繰り返したところ測定

科学技術の進歩によつて、濃縮と化学分離を繰り返したところ測定

科学技術の進歩によつて、濃縮と化学分離を繰り返したところ測定

(江戸川大学名誉教授)